

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

SUN通信 第3号

2016. 7. 1 発行

NPO法人 自立支援事業所
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 Di o 23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-299-3107

第2事業 SAN南郷5 稼動開始

（株）パートナーの社会貢献部門として、サンレジデンスの事業が始まってから現在に至るまでの活動は、様々な理由で仕事や住む場所を失い、途方に暮れていても、本気でもう一度自立生活を送りたいと願う人達が主な支援対象でした。毎日のように、絶え間なく各方面から相談の連絡が入る現状において、この活動は今後も継続していかなければならないのは言うまでもありません。

しかしながら、サンレジデンス設立から6年、また、NPO法人として生まれ変わって2年が過ぎようとしている今、現状の活動だけに満足するわけにはいきません。そこで、新たな社会貢献活動として、この第2事業を稼動させました。

その第1号棟となる「SUN 南郷5」は、高齢や障害等により、単身生活に不安を感じている方に対して、一定程度（食事提供、見守り等）の生活サポートを行い、一人ではない安心感の中で生活していただく共同住宅です。



SUN南郷5 正面入り口

この「SUN 南郷5」の最初の利用者となったYさん（70代 女性）は、ご主人と死別後、知的障害のある長男、長女と3人で市営住宅に住んでいました。しかし今年1月、バス乗車時に転倒し、大腿部を骨折する大怪我を負い入院、4ヶ月後に退院しましたが、常に杖が必要となり、手摺のない階段等は昇降も難しい状態になってしまいました。さらに悪いことに、今住んでいる市営住宅が9月に取り壊しになる予定だということです。長男と長女は新設されるグループホームに入居が決まっていますが、本人だけが住む場所を失ってしまうという事態に直面しました。また、怪我のせいで身体を思い通りに動かせなくなったため、今後は入浴や通所といった介護サービスを受けたいのに、国民年金と遺族年金を合わせた月10万円程度の収入ではそれも難しく、いったいこれからどうしたらいいのか分からない状況に追い詰められていたそうです。



SUN南郷5 共同食堂

Yさんが入院していた病院からの相談で、今回は我々と繋がりました。生活保護を申請したため、医療費や介護費用は無償となり、今は安心して必要なサービスを受けています。

今回のケースでは、今後ますます進んでいく超高齢化社会の問題点をまざまざと見せ付けられた気がします。実直に働いてきたのに、い

ざ老後を迎えてみると食べていくこともままならない。そんな人たちが、この国にどれだけ

いるのかと考えると、やりきれない気持ちになります。そして何より怖いのは、このような人たちの存在が、社会の中でなかなか「見えにくい」という事です。核家族化が進み、独居高齢者が急増しています。このような人たちに対して、どのようなアプローチが出来るのか、社会全体で考えなければなりません。何故なら、これは私たちにも直結する問題なのですから。

まだまだ手探りの状態でのスタートです。私たちサンレジデンスは微力ではありますが、この第2事業を通して、安心して生活できる環境作りをさらに広げていきたいと思えます。

この環境にいられる感謝をこめて

入居者とのリクリエーションとして、サンレジデンスの恒例行事であるパークゴルフ大会を6月10日に行いました。入居者とスタッフ、アパートナー札幌支店の皆さん、そして前回に引き続き、照井会長にもご参加いただきました。

大会を始める前に、今ここで働かせて頂いている、また活動させて頂いている感謝を込めて、7月に古希をお迎えになる照井会長に感謝状とプレゼントをお渡ししました。サプライズだったので驚かれたようですが、嬉しそうに受取って頂いたので、私たちもほっとしました。(株)アパートナーを立ち上げて43年、さらには保護司としても貢献されている照井会長は、古希をお迎えになると



感謝状とプレゼントを受取られた照井会長

は思えないほど若々しくバイタリティーに溢れていて、はたから見れば私の方が老けて見えるのじゃないかと思うほどです。刻一刻と変化する社会に対応し、長きに渡って事業を継続、また社会貢献活動にも力を注ぐ環境を作って頂いたことに心から感謝し、今後もますますお元気で活躍されることを願ってやみません。

ちなみにパークゴルフ大会の方ですが、今回からは入居者もスタッフもハンディなどつげずにガチ勝負。そのためか、過去の大会と比べて参加者の表情が幾分真剣だったように見えたのは私の気のせいでしょうか。ともあれ、いい大会になりました。

辛すぎる出来事 仲間の死

平成 28 年 2 月 6 日、不慮の事故により、スタッフの櫻井大輔氏が永眠されました。37 歳という、サンレジデンスでは最も若い仲間で、将来を期待される若者でした。誰からも愛される、本当に、本当にいい男でした。

彼が亡くなってそろそろ 5 ヶ月になります。もう 5 ヶ月？ まだ 5 ヶ月？ ときどき時間の感覚が分からなくなるくらい、彼の存在は大きなものでした。個人的にも、私にとっては親友であり、また弟のような存在でした。私たち共通の信条である「人間はみな幸せになる権利がある」という言葉を理解し、困っている人を助けたいという、誰よりも強い使命感をもって仕事を続けていました。まさに誰もが認める、この活動におけるプロフェッショナルでありました。仲間意識や連帯感も強く持っていて、プライベートでもいろいろな話をしたものです。新たな支援活動が出来る喜びに満ちた表情で、第 2 事業の準備にも積極的に取り組んでいた矢先、あまりにも突然、彼はこの世を去りました。



2 月 3 日の夜、私たちは会食の場を設け、今後の活動のあり方や問題点、また個人的なことも話しながら、実に有意義な時間を過ごしました。どちらかというとな静かなタイプの彼が、このときは熱く自分の意見を語っていたのがとても印象に残っています。2 時間ほど飲食したあとに会はお開きになり、それぞれ

自宅に戻ることになりました。2 月の北海道、一番寒い時期です。もちろん辺りは一面の

スタッフと共に 在りし日の櫻井大輔氏（左から 2 人目）

銀世界、歩道も凍っています。おそらく靴底に雪が付着して濡れていたのでしょう、櫻井氏は自分の部屋へ続くアパートの階段を昇りきったところで足を滑らせ転落、後頭部を激しく打ちつけてしまい、意識不明となりました。そしてそのまま一度も目を覚ますことなく、彼は逝ってしまったのです。

情けないことですが、彼が亡くなった後しばらく、私は何もする気がおこらず、何かを考えることすら拒否してしまう状態でした。いっそのこと、この活動に携わること自体やめてしまおうと考えました。本来であれば、このSUN通信第3号は3月に発行する予定だったのですが、とても記事を書く気になれず、発行が遅れてしまいました。



本当に 弟のような存在でした

残酷なまでに、日常的な時間が流れていきます。まるで彼の存在をかき消すかのように。でも、私はいまでも彼の存在を身近に感じています。「松下さん、昼メシどうしますか？」なんて言いながら、ひょっこりと事務所に入ってくるような気さえします。

櫻井氏のためにとか、彼の意味を引き継いでなどという言葉はとても空虚に聞こえます。そうではなく、彼が生きた証、社会に対する彼の功績、そして何より、彼は確かに、ここに存在したのだという事実を証明し続けるためにも、私も再スタートすることにしました。

そして 先に・・・

櫻井大輔という素晴らしい男と共にこの仕事を続けてきました。そのことを誇りに、さらに精度の高い支援活動を目指します。この活動は止まることが許されません。生活に困窮し、明日のことすら考えられないという人たちが、今日もどこかで、絶望的な思いを抱えて彷徨っています。現場を預かる者の実感として、その数は想像を絶します。

第2事業も始まり、さらに忙しく、また様々な問題にも直面するでしょう。それでも、そんな人たちの砦として、サンレジデンスは存在を続けなければなりません。